

記号をめぐる思想

—序 説—

広 瀬 友 久

記号といふ言葉が、表題あるいは表題の一部となってゐる書物が、数多く目に止まるやうになって既に久しい。それらはいはいては、「記号学」の概説書であるか、又は「……の記号学」といふ形の応用の書物であるか、どちらかになってゐる。概説書に於ては、だいたい、まづ記号の定義が行なはれ、伝達・意味作用・意味生産といったその機能が説明され、それに関連した様々な用語が導入されて、「記号学」なる学問体系が成立してゐることが示されてゐる。また応用の書物は、その多くは、既存の学問の諸分野の問題を、記号学の用語で扱ふとどのやうになるかを記したものとなつてゐる。

記号の定義は、定義する人の数だけあるといはれてゐる。しかし、今述べたやうな記号学の書物に共通してゐる記号観は、記号が實在の代行物であるといふものであるやうに思はれる。その場合には従つて、事物の存在は記号の成立に先立ってアプリオリに仮定されてゐるのであり、記号は後からその事物を表象するに過ぎないものとなつてゐるのである。つまりここでは、記号は、強固なコード体系の存在を、といふことは既に出来上つた文化の存在を自明の前提としたうへで成り立つてゐるといふことによい。このやうな場合、問題とされるのは、記号と事物の関係であり、それに従つた記号の分類といふことになるが、記号を成り立たせてゐるやうに見える事物、つまりは既成の文化が問はれるといふことはないわけである。コードの存在が自明となつてゐて、その体系の内部にゐる限り、それを問ふこと自体が不可能となつてゐるといへよう。

コミュニケーションといふことを中心に置く場合には、このやうな考へになつてゆくのは当然とも考へられるが、意味生産といふことを強調しても、事態はそれほど変わるわけではないであらう。新たな意味を生むための開かれたシステムを設定するときには、既にその外部をメタレヴェルに立

って見てゐるのであり、それは全体としては、内部と外部の関係がコード化された一つの閉鎖系を作つてゐるに過ぎないわけである。かくして、このやうな記号学を応用していった場合、それは既にほかの言葉で言はれてゐたことを、記号学的用語で言ひかへたに過ぎないものとなつてしまふのである。

このやうな記号学は、何故記号を出してこなくてはならないのかといふことについては、その内部では問ふことも答へることもできないのである。つまりここでは、記号が思想的意味をもつてくることは不可能となつてゐるのである。それでは、記号を考へることが思想性を帯びてくるのは、どのやうな情況のもとで、どのやうな問題設定がなされたときなのであらうか。恐らくそこには、今述べたやうな記号学では自明の前提となつてゐた文化そのものが、そしてその文化を成り立たせてゐるものとしての言語が、記号として意識され、その根柢が問はれるやうな情況がなければならぬと思はれるのである。

言語を考へるに際してまづ言へることは、普通私達は、言語表現の背後には何らかの意味が存在すること、そしてその背後にはそれに対応する事物が存在することを、自明としてゐるといふことである。私達は、日常生活に於ては、普通は媒介者としての言語それ自体を意識することなく言語活動を行なつてゐる。言語はいはば透明な媒体であり、言語自体の姿、物質的手触りが気になるといふことはまづない。そしてまた、このことこそが、自然言語の自然言語たる所以であると思はれる。それは、本当は人工物でありながら、既に自然のものであるかのやうに存在してゐるのである。そしてそれ故に、その言語によって分節化された事物の世界、つまり文化も自明なものとされてその内部で問はれることはないわけである。

このやうな日常生活の言語意識のうへに、さらに理性といふ虚構を重ねることによって、一義的な意味の体系を組織し、それを絶対的なものとしていったのが近代ヨーロッパであるといへよう。ここでは、言葉にはすべて明確なイデアの意味が存在し、それがまたこの世界の秩序とびつたりと対応してゐるといふことが信念となつていったわけである。それは、フランスの古典文学に於ける、「すべてが言葉によって表現できる。」といふ考へ方を支へる信念であつたし、また、ヘーゲルに代表される、「すべてに理性が完徹する。」といふ思想にも、その根本に於て一致するものでもあつたのである。当然ここで問題となるのは、言葉自体の姿ではなく、その

表はしてゐる意味であり、それに対応する事物の秩序であるといふことになってくるのである。

この近代ヨーロッパに於て、記号を考へることが思想的意味をもってきたとするならば、そこにはこのやうな信念を支へることができない状況が生じてきたことが考へられる。それはまづ、言葉のもつ表象機能が失はれたといふ実感として現はれたのではないであらうか。そのために、透明な媒体であったはずの言語が、言語それ自体としての生々しい姿を現はし、記号として意識されるやうになったといふことが考へられるのである。日常のレヴェルで自明な言葉の表象システムを、さらに形而上学的信念によって完結したものにしてしまふとき、かへってその表象機能の根拠が危ふく見えてきたといふことがあったのかもしれない。あるいはそこには、言葉に鋭敏な人たちが意図的にとつた戦略があったとも考へられる。つまり、理性といふ超越的な後楯を得て、明確な一義的意味を押しつけてくる近代知によって窒息させられた人間の象徴化能力を回復させたいといふ意図から、一たん表象機能から切り離した言葉の姿を浮上させてみたいといふ願望が生じたといふことが考へられるのである。

とにかく、言語を根拠づけるにせよ、それを活性化するにせよ、ここでは、言語を一たん事物から切り離し、さらには確定した意味を括弧に入れることによって、それを露呈させるといふ方向がとられたのであった。このやうな操作によって言葉から表象機能がぬけ落ちてゆけば、そこに現はれてくるのは、形式的な関係の網の目である。それは、差異の体系といつてもよいものであるが、この方向をさらに徹底させてゆけば、差異の発生場の場にまでたどり着くことになるのである。そして、この混沌と接するぎりぎりの場所まで記号を解体することによって、これまで自明なものと見えてゐた事物や意味が、つまりは文化が、実は全く言葉といふ記号によって成り立ってゐたのだといふことが明らかになってきたのであり、さらにその記号の発生そのものは、全く自然的な根拠をもたない、つまりは恣意的なものであることが明らかになったのである。人間がそれによって生きてゐる文化は、実は混沌を隠蔽してゐるだけの実体も根拠ももたないものであることが見えてきたのであった。

記号をめぐる思考がここまで展開してくれば、それはもはや近代批判といふことにはとどまらないであらう。記号以前には事物や意味は無いとするなら、そしてその記号は全く恣意的に発生する差異から成立するとする

ならば、一義的な意味の体系としての理性を立てることは不可能であることはもちろん、自然言語の自然性すら、実は何ら自然に根拠をもつものでないことが明らかになるからである。今日、もし日本で、記号を考へることが思想性をもつとするなら、この二点が微妙にからまってくることに於てであると思はれる。まづ、日本は、歴史的にはかなりヨーロッパと平行した道を歩んできてをり、明治以後はヨーロッパ近代に対し、ある部分はこれを取り入れて根づかせ、またある部分はこれを拒絶してきた。このヨーロッパ近代とかかはり、これと対決するといふ場に於ては、記号を考へることが、近代を批判しこれを相対化するための有力な戦術となるであらう。しかしそのためには、中途半端なところで近代を受けとめてはならないのである。近代は、一貫性・徹底性といふことをその本質としてゐるのであり、少くとも理念的レヴェルに於ては、その徹底化したところでこれとかかはる以外にはないのである。

さらに日本に於ては、伝統的に「自然であること」が重んじられてきた。しかし今や、人間にとって自然と見えるものであっても、「自然」に根拠があるといふわけではないといふことが、つまり人間にとっては「自然そのまま」といふことはあり得ないことが明らかになった。かくして、記号を考へることによって、私達は、自らの文化の最も自然化してゐる部分をも、自明なものとはせず、常に問ひ直してゆくことができることになるわけである。